

門號
號
卷



構作又鼓を擊角を吹乃もから以士を簡ひ兵を芻もん
乞巣磨竊ふ防授人ニ同は對馬島を伐取んと為ふ事と
云候乞巣磨禁を脱き獄を出テ繩子逃ぬく事情を陳
川然ハ早く縁海内諸郡警固を致シ表へ一と奏一川あ
みよシ因惱伯耆出雲石見隱岐等内國司ふ下知あく守
禦乃具を修造せしむ十又日宇佐八幡大菩薩宮香推廟
宗像大神甘南備神ふ奉幣あり告文乃御使を役立佐下
主教權助大中臣國雄おつま深草田邑指列乃山陵へゆ
御使あり新羅の寇賊を禦せみ人畜を靈廟を加えさせ
玉へと云ことを告文ヲ載らせたま

新羅も魏の新盧國もと辰韓乃種あり辰韓も一卷六

最上慧證

明治三年十月七日購求

國後分十二とある新羅も其一船更始祖朴赫居世

漢乃五鳳元年甲子正月國を立と云日奉崇神天皇曰
十一年ふ當ふ朴赫居世に十七代を膺廉と云に十三
代傳康王内孫阿喰啓明乃又に十六代恩安王内婚
唐乃咸通二年日本貞觀正月立今歲ハ即位十年あり
聖後五年乾符二年七月薨以日本貞觀景文王と謚以
今世ノ釜山浦の地と云は即新羅ノ地あり對馬島を
去てに十八里と云其實モ廿里餘と聞里

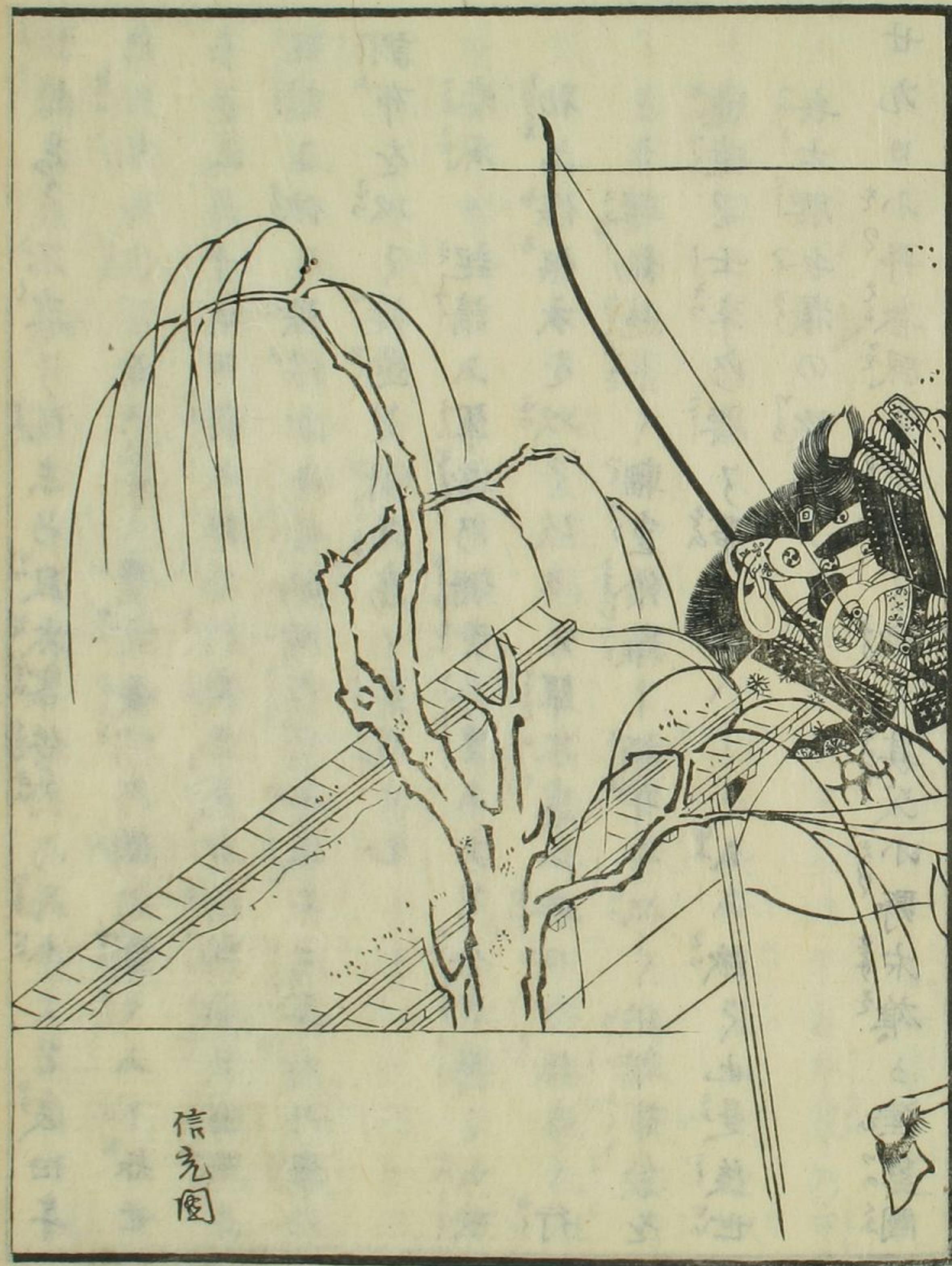
廿日諸主に百廿九人内裏縁を減せらるを御を公卿
議申ふ候廿八日勅去之に公一を減一人人

縁冷ふ允皇親年十三以上又も皆時服内料を給へ春

ハ絶二足糸二絹即ニ斤今乃布四端鐵十口即三十斤
百秋ハ絶二足綿ニ毛即ニ斤今乃布六端鐵四廷即
十六足八兩今乃とあ也ハに百廿九人ふは絶千七百
貫七百七十反とあ也ハに百廿九人ふは絶千七百
六斤八兩今乃とあ也ハに百廿九人ふは絶千七百
十六足八千七百六十東弓准綿五百准八百八十
百五十東弓准一千二百九十九口稻同布四千二百
百十六東弓一千二百九十九口稻一千二百九十九
十二東弓當ふ米今升一万八千八百八十九石又斗七
升一合余か少々一當時朝廷萬乘の貢賦之少と云
共是計内取捨焉國用の豊儉内關係んや蓋權臣諸王
乃繁昌を嫉妒く些サの縁を割足量を弱めんと議是

先あむ共算數内微事 天皇乃聰明を掩ひしと慨歎
ふ堪を但諸王とは皇子の親王とからん姓を賜ひ
やが前を云又親王の子を二世王と云ニ世王の子
三世王 皇曾孫 二世王の子に世王 皇玄孫 又世王の
至く皇親絶く始く諸王乃列を離る是時賀陽親王の
長子忠貞王後に位上様津守仲野親王の子基世王後
に位下失々然る其衣服絶く足糸一約八兩即今九
布七端ニ丈六尺綿一屯一斤を用ひら新しく質素と
云極一星を以て今を省ハ儉とせんと奢とせん
星日新羅人洞清宣堅等三十人支閑内ため久敷太宰乃
管内ノ居住せ一かは能我國内物色を候ひ知へし新羅

内寇賊未侵の時内應をあさは後悔もとゆ其後あらふ
而一水陸両道り食と馬を給く宗又八一充然後陸奥乃
空地み遷一観覩乃舜心を絶つむへ一と太宰府へ下知
せら新又新羅國の民七人對馬島へ漂來是例ア依クモ
糧を給く放還アふ並一と云共乙屎磨申状乍就く思
ハ詣テ漂來と称一實ハ乙屎磨か逃歸く詔を漏ちくを
疑ふ氣色を見んため斯七人を差遣をあつハ非る
にを無く放還をへ尋常の時の事あつ後舜往來もとふ
さきより廿二日參儀後に位上行太宰大貳藤原冬緒乃
申請了依ク太宰管内國を島々下知あく烽燧を置



調練多々不虞ヲ備出め且太宰管内乃馬今より後四年
内間閣を出でるゝと豊前長門内閣内閣々下承せ
らるゝ三月十六日復又位下行對馬島守小野朝臣春風
起請ニ依ニ保作衣牛領納鞴帶袋牛枝を太宰府内庫内
調布を以て縫造対馬島ヲ備置一む

春風より起請入軍旅内儲産介胄ニア足介胄薄と云共
助ニア保作衣を以て以て云云軍不虞ニ興日を候あく行
とキ轉餉絶易く輜重給難一調布を以て納鞴帶袋を
縫造士卒ヲ腰ヲ帶ノむへーと云々依ニ也是後世
兵士腰兵糧の始也

廿九日小野春風より申請ニ依ニ其父小野赤雄より陸奥國

永正一時弘仁乙年告祿候部止彼頃可年多知等より逆亂
せしを赤雄討平ひ一時ふ著大弓羊革内甲と牛革内甲
とを春風内見春枝公が進大臣然ふを今羊革内甲を以
て春風内給牛革内甲を春枝内給入春枝と云ふ陸奥守
大正五月十九日出雲國准支生後八位下雁高宿称松雄
を以て督警師とある出雲國内置警衛ヲ備人松雄より
と作るを以て於是組史生一負を廢へーとも六月七日
選士五十人を對馬島内置へとすを太宰府へ勵宣あ
は八月十日鼓吹司内庫法式を寫さしもく隱岐國司内
失主廿八日對馬島内擎持一負を置

新羅國人劍を学ひ戰を習ひんと云を仰ニ邊要内國

郡ふ備ら新くあり

九月九日重陽節紫宸殿ふ御せひの宴を辦^{ハシム}了^{タリ}賜^{タス}もり
又天錫難老と云題を以^フて文人^ヲ詩を賦^{セシム}む内教坊
乃女樂以下常乃娘^ヲ十一日文章得業生正六位下菅原
朝臣道真對策中^ノ上第と云を以^フて正六位上了叙せら
家時^ノ廿六歲十三日第に皇子誕生あり 皇太子同母
乃弟^ヲ王^子貞保親^{王^子貞保親}十一月十三日筑後國權史生正
七位上佐伯宿^ノ直繼新羅國牒を得^ク奉進且太宰少貢
從五位下^ノ最原朝臣元利萬侶と新羅^ヲと謀を通^フ一國家
を害^{ラシム}とを歎入^キを告依^フより直繼^ヲ身を禁^ムく
檢非違使^ヲ付^ル於^ハ猶^{アリ}清原崇繼中後年唐興世有年

元利萬侶と同謀乃衝を訴入ふみよ^リ大内記安倍興行
を太宰府ふ遣ち^ム立人を推^メせら新廿六日佐伯直
繼^ヲ防^護を差^カク太宰府^ヲ下^ハ
十三年二月八日公卿^ヲ政官尋常乃改^ムを傍^ハふ辰^ノ刻^ヲ
用ひら新是^ノ己一刻^ヲ新へ^クと河魁滅門を避^ムふ
か故^{アリ}と越
河魁と^ハ六壬式乃十三月將の二月成將^ヲ太政官
中納院乃已ふ當^ムニ月己時河魁己ふ^{アリ}依^ク是^ノ
を避^ム辰^ノ時^ヲ用ひら新^ノ辰^ノ時^ヲ河魁滅門を避^ムふ
察^シ大^シ察^シ乃方^{アリ}滅門^ヲ課^乃名^ムふ^ク滅門^ノと同^一
からを詳^シ六壬式ふ見ゆ^ハ爰^ニ累^ミ

十二月 天皇ノ宴賓殿ニ御セルヒ事ヲ視ムハ蓋承和ヨ
又以徃モ皇帝曰「トニ肇宸ニ御セラ」政事を視ムヘ

又仁壽元年以降絕々比儀あり星日初ニ是を行ヒ敷當時衆庶是を慶入承和ハ仁明天皇ニ

仁壽元年より是歲ふ距まく廿一年於其際一人ノ師範とくに海乃儀形大ふ極キ太政大臣衆務を統理一綱目を擧持一庶事ふ總判大ふ左右大臣承和以往乃典故廢く志色失ある如一然ふを天皇今新年是を興一是を擧ふ入衆庶曠世乃盛事を仰キ希代乃洪典を樂と云共執柄乃諸大臣寒心戰慄せさんは有極ろらん

12月十日太政大臣良房固讓セリニ子戸を併太政大臣乃食封三千戸を全く食へモ由ト内舎人二人左右近衛各六人を隨身乃兵とあつ帶仗資人三十人官准ニ官乃給法乃如く受ク先朝乃寵光を顯き極一ト勅セラ數十に亘太政大臣表を抗ニ食封内舎人以下を辭讓セと云其許モ終モ十八日重孫ノ表を抗ニ辭讓モ云く荒年祭祀充豐ありヒ嫌歳威儀僨約了終ム今陛下藜羹自存・王公茅土且減モ臣邑を食さる乃意を全一て將了己を先んさま乃嫌を折んヒ若事已を得ヒ義必行入廻くモ五年登足群臣舊ふ復一然もく後同く所減を享は臣も願足矣陛下臣も私第ふ就てを許

弘ナヒ直盧を禁中み賜入霸仗百重隨身何乃用ひ家
か有ん虎賁千列せ又帶仗安ふる施以廻シと有ノ程
食封年官等也 先帝乃遺親スノミ朕ろ新意アアラヒ
考スモ善ニ志を述忠臣モ立ニ心を失ム公忠臣ト
アリ朕孝子たらば亦美からセや食封分クシトカ一以
ク其ニを受ヘ一自餘モ前 訴乃如くせよ復聞セルト
無モト 勅答アリ五月六日重ニ苦ニ辭表を抗ラセリ
カト由許マセシ廿日お至ニ食封ハ舊乃如クセキ廻ノ其
餘モ有司ム命セシ施行一訖改ム亦改ム難一トモ聽ク後
セ

太相國良房ハ先朝乃大臣大内公也 今皇乃外祖父也

食封以下を辭讓セラホヘ了如是悃款を竭マムクノ
及ヘクシ然アリ上表數度スノミ勉强是を拒ケ益
天皇乃英質威嚴辭セキ承トを得マム所以ト失ラム
八月廿八日右大臣氏宗及ヒ參議南淵年名參議大江音
人式部大輔菅原是善勘解由次官紀安雄等 勅を奉
ミ貞觀式廿卷を撰一畢

弘仁乃修撰諸司式四十卷今佚セ弘仁十一年大納言
冬嗣卿乃撰アリ爰アリ五十二年又及人流寔代典
古を改メ今了宜キを採文武ナ折衷也貞觀新式を
定ムセリ一ト貞觀格ト意を同一くシ右大臣氏宗ハ贈
大相國房前乃長子鳥養乃子大納言小黒磨乃一男中

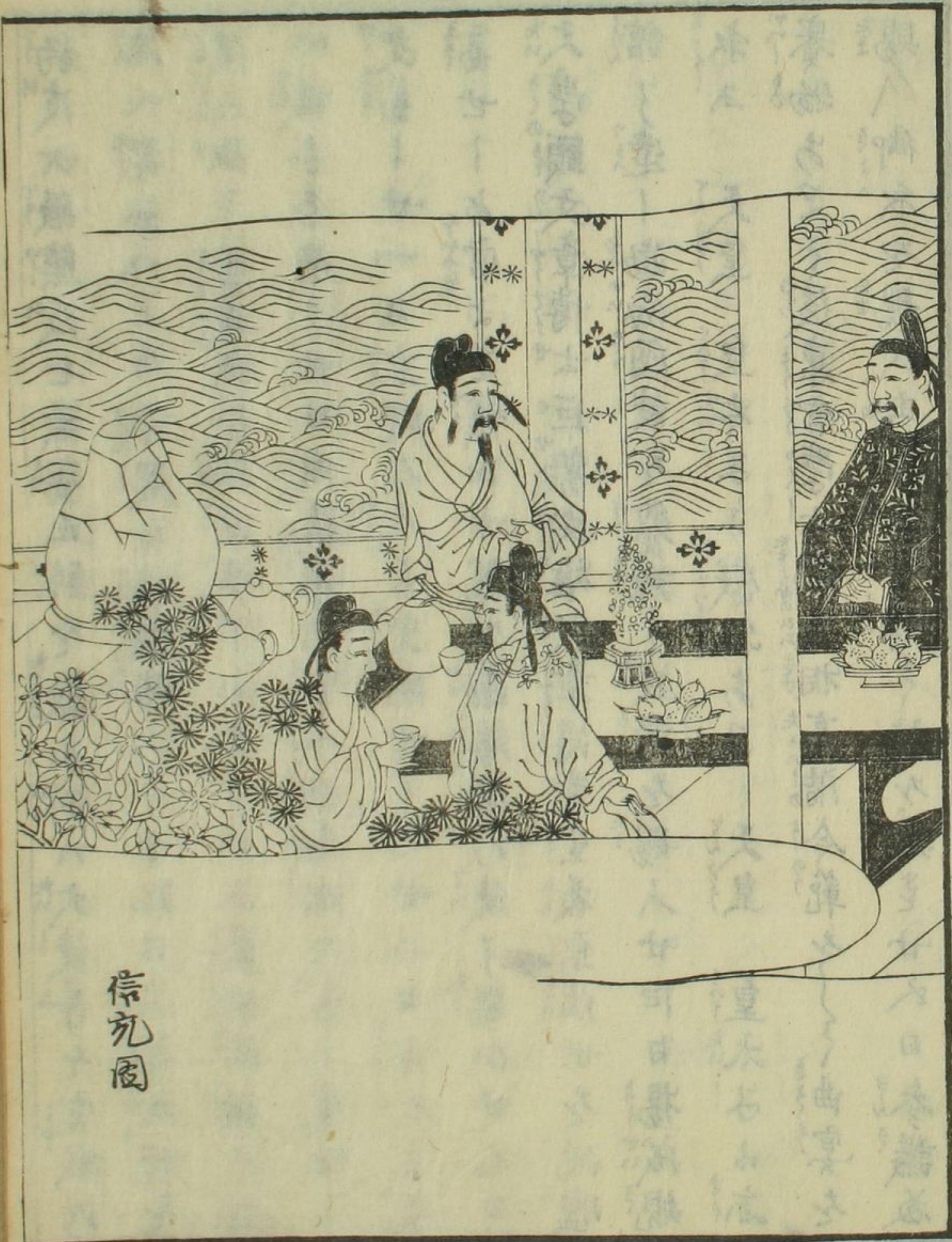
納言葛野磨乃末子アキ太政大臣良房と共々贈太政
大臣房前立世乃孫又ノ年齒少亦頗る衰せ又仁壽
以末乃弊を改新せんう爲ふ此舉ふ及へ斯からん
閏八月廿八日山城國葛野郡五條荒木西里六條久受原
里紀伊郡十條下名原西外里十一條下仇比里等乃河原
を百姓葬送放牧の地ふ定めらる耕嘗を停へキ使を制
せらる

喪葬令ふ皇都及ひ道路の側近より葬埋せることを得
リ色と見ゆ然家ノ瀬日愚昧の輩令乃旨ふ違ひ競く
占營一々便宜を失ふる故ニ歎美之及む也一於是
九月廿八日太皇太后順子崩アシカ仁明天皇乃女御ふ

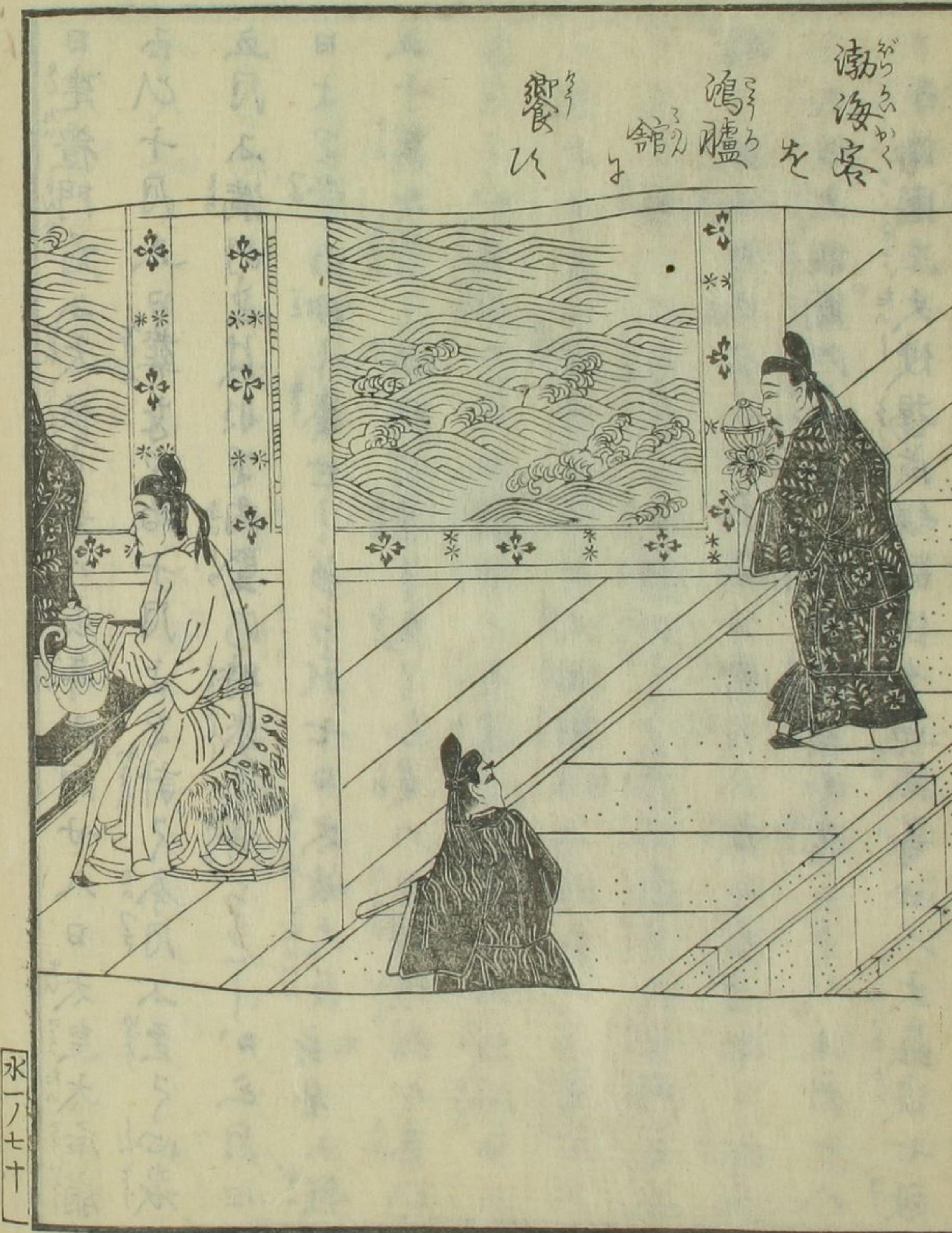
文德天皇乃母后 天皇乃祖母又在以廿九日諸衛警固
并ふ諸閑乃警固例乃如一但時秋收又在ハ農業を妨く
廻一とく使を發せらる以十月十四日太皇太后乃遺令ニ
依ニ京畿七道又哀を舉素服を着て停ふ人五日今日
より 天皇錫紳を服せ玉へは迎長皆素服もく太皇太
后を山城國宇治郡後山階の山陵に葬る
山階陵と云ふ天智天皇の山陵又依ニ太皇太后乃
陵を後山階陵と称ふ於是其地定やからん蓋今安
祥寺の邊あらん然家ノ捨茅棚又後山階陵醍醐天
皇醍醐寺北曼多羅堂乃丑寅又在と云ふ自別か是
十一月十七日園韓神十八日鎮魂十九日新嘗會平野春

日 梅宮大原野寺乃祭を停る。廿九日建禮門前ふ大祓
至太皇太后崩後六十一日於是十二月十一日神祇官入
於是月次神今食乃祭を修り十二日官内省又於是鎮魂
乃祭を修せらる。東宮乃鎮魂山同く行を走大足
十四年正月壬申朝賀を受ふ。是日乃節會も停ら
也故但左右馬寮乃青馬各七疋内殿乃前ふ。是日を
覽ふ人と云共總て裝飾せらる。以八日太極殿了於始
之最勝王經を講せらる。然共音樂を舉り十六日踏歌乃
箭も停ら。十七日射禮を行ひ。是二月二日大原野祭
常乃如くあむとて使等歌舞せし。七日釋奠行。家臣丈
人を召せし。蓋太皇太后崩後心喪の日未満故あり。卅

日建禮門前ふ大祓を是へ去年九月廿八日太皇太后崩
正月五日葬事。是故十月より計て今月五日至く心喪
五月未満。内は般内暨乃時奏も停ら。一か二月に
日よ是常乃如く奏せしめら。是七日太政大臣良房ふ。錢
五十萬を賚り。亦禱乃費。是も是へ日頃咳病を患ひ
たれいか。去月十八日禁中乃直廬より退出。乃後治ると
ゆ見えり。於是か。是九日太相國良房ため不度者。以
十人を賜り。又天下ノ大赦行。是道俗高年乃者。鳏寡孤
獨。子賑恤を加ふ。人に月朔日侍臣ふ。飲食を宜陽敷。是賜人
と云。共太相國乃病。是も是日音樂を舉ら。是五月十八
日渤海國王丈使楊成親副使李與成等廿人大蟲皮七張



信光圖



水一ノ七

豹皮大綬熊皮七綬蜜五斛を獻る例ハ大使等を宮城内
内へ召みへと申今度モ鴻臚館ムニ十九日又揚成親を
從三位李興成を從に位下ムアリムニ蓋大相國乃病
か故ある毎一廿日内藏寮乃官人渤海國乃密と貨物を
交易一廿一日京師乃人と交閑せしめ廿二日市人と交
易せしめ官より錢に十萬を渤海國乃使ノ賜ハ廿二日
大學頭文章博士巨勣文雄文章得業生後原佐世を鴻臚
館ヲ遣一渤海國使を饗讌一且祿を賜ム廿日に日揚成親
私ム 天皇 皇太子子ノ獻物あり 天皇 皇太子子亦
賛物あり後東宮學士橘廣相高階令範を以て曲宴を
賜ハ御衣を賜ム主客具ヲ醉々詩を賦ミ廿八日參議及

原家宗右近中將源與大内記大江公幹を遣一渤海國
王ム 勅書を賜ム

菅公是歲正月六日正六位上行幸内記ムニ存問渤海
察使を兼みひけふト安大伴氏乃憂ニ丁々職を去
故ム渤海客と應接ア

七月十一日に足守禪云尹惟喬親主疾ム依ク頓ム出家
沙門と爲ム入 天皇乃見スオマヒ母モ紀名虎乃女
船尾廿九日皇太子深嚴宮ヲ幸セム入太極國乃病劇
ム大納言正三位藤原基經を右大臣又孫陽久中納言從
三位源兼從三位源常行を大納言又參議從三位南潤

年永後之尼義原良世を中納言と後に位上管原是義義
原仲源能有を參儀とありふ

左大臣融ハ嗟噭天皇の源氏ム

仁明天皇の弟

天皇乃後祖文仁等親とひ是歲立十一未大臣基矩ハ

太相國良房乃養子天皇乃舅也

仁明天皇の源氏

文德天皇の弟

三十七源多ハ仁明天皇の源氏

文德天皇の弟

天皇乃叔父ニ等親あ是歲に十二歲原常行ハ皇太

后乃後弟ニ等親あ是歲三十八天皇乃官を授け

云入了其人を銓衡あり云入法あふと是乃如一

廿九日皇太子深殿宮う幸せ云入九月二日太政大臣從

一弦箋原朝臣良房薨行年六十九天皇乃外祖文仁等

一弦箋原朝臣良房薨行年六十九天皇乃外祖文仁等

一弦箋原朝臣良房薨行年六十九天皇乃外祖文仁等

親あ是二月乃服紀ふと除帛衣雜色を通用せら素又
太政大臣と云を以て詔部大輔表事を監護一絕五十疋
布二百端鐵十五連を轉ら也方相轎車各一具鼓百に十
面大角七十ト小角百に十ト幡八百竿金錘鎧鼓各に面
楯九枚木子綴哀八日愛宗都賀樂岡向河内地を擇キ葬
ら也け矣

應永年間寫本洛外圖ふ愛宗墓の月輪川乃東ふあり
其東ふは惟方卿長實卿實方朝臣乃家並ひく何も白
河乃家と称是今田中と云邊と知る也と今其地を定
ゆる記入歟

諸衛警固諸關乃敬言衛常乃如一三日御燈乃齋を停ら也

十四日故太政大臣良房ふ正一位を贈又美濃公ふ封一忠
仁と謚一食封資人平日乃如くせよと云 誓書を右大
臣基矩ふ賜入

忠仁公六世祖右大臣不比等公乃女宮子ハ 文武天皇乃
正妃ふく聖武天皇の母后於是其妹光明子也
聖武天皇の皇后ふく孝謙天皇の母后あり然ハ
右大臣不比二代乃外祖父と云を以テ薨も後太政
大臣正一位を贈らき文忠と謚一食封資人生日乃如
くせよと有く後淡海國十二郡ふ封一淡海公と称セ
らき一例ふ據き一般家へ一

八日ふ至く諸衛嚴を解諸園乃警も同く解ぬ九月二
日より

斐ふ至く九日重陽乃節も停らき十一日伊勢太神宮乃
七日あはれ奉らきを卅日右近衛大將大納言義宗常行表を抗
幣も奉らきを卅日右近衛大將大納言義宗常行表を抗
て大納言を辭と云共聽もきく十月六日左大臣融表
を抗く職を辭せ然と山優詔もく聴もきく十日木大臣
基經表を抗く故太政大臣忠仁公乃封邑を辭し申て
臣公乃先臣終ふ臨臣を識我下世乃後朝例給をふ彼乃葬
送等乃物凡諸公乃煩と為へき者少と般く大と般く固
辭もく一切ふ請あと無ふ廻一と也因願人唯號謚を加
以く殊恩を表し職封國封等公乃於く費あか者後く停
廢せんと也 勅令ふ軍法乃へ牙門將を斬者も萬里の
外子封侯せら新主一将を斬り功天下を安寧せ一故太

政大臣乃功と孰與朕へ思う答へ公も道不食足宜く前
詔乃如くあく請所有と無事免一と七十日右大臣基
公表を上々云く禮乃強仕臣う齒朱其期未満を書乃阜
成臣う能ま其事ふ及ちん昔甘羅う一十餘ニ多智を以
て廿年とせん今徵臣う二十有七無才を以く猶未早と
謂足伏願臣う所帶を退け梶路をく曠官乃巖を絶去
免んとく大臣を辭を優 びもく許せん

右大臣基經養父太政大臣忠仁公乃喪了官を解し年
齒乃未滿を以く職を辭を孝子乃情ふ於く懐とせん
昔淡海公薨せ一日武智磨ハ式部卿房前も參儀たる
然るふ憂を以く官を去百五十日ふくく位一階を進

從二位入叙一中納言不任を後長岡右大臣内唐麿一
て後又十九日又く冬翻正に位下入叙一左近大將
を兼先駆かくり姫一右府基經何我是を忍へ家や
十六日右大臣基經忠仁公乃封爵を辭を 勅答ノ公乃
功蛇立よ是高く封蟻垤よ是卑一設使讓草十上をる共
一從を欲せんとく許せん十一月二日右大臣基經職
封乃一半を還し納んとを請 証ノく是を許せん
右大臣食封二千戸職田町正三位食封百三十戸位
田に十町を給き無く然ふく一半を還し納く千六十
戸叶稻田万ニ三十戸町正一万七千石獲稻六万百東
果今量二千九百十斗入一千石升餘四斗入七千二百
八十石俵余根足

を領を承ある也

八日通夕雪ふる曉行止ひ右大臣基矩以下參儀以上侍
従所ス於ノ雪を賞し會飲を詫シ内藏寮内綿を賜
人侍従又位以上も同く賛ふ頃ふ

是時左大臣融辭表を抗ふて再び及ヒ許容を得ヒ
と云共出仕せを蓋帯大臣其妹女御高子乃寵を接と
あし媚を披庭椒房ス釣り儉約の政み就く食封位固
乃半を還一虛譽を當世母干むかを忌一あふへ一貞
觀内政ちくア至く一弛せ一ふ幾一參議八人中納言

三人大納言三人右大臣一人亦是

十二月十二日贈太皇太后高野氏

植武天皇后國乃山

忌十二月廿八日

城國乙訓郡大枝山陵も六世乃祖妣もあく皇親既ふ絶
た也ば故を捨ふ内理ふ従ニ是を除キ太皇太后藤原氏
後山階ふ陵天皇皇祖母を承く十陵内數不足一め太政
大臣贈正一位藤原順子良房愛宕墓を守除郡乃に墓ふ
加えく五墓とあ一年給荷前内幣を獻し弘平廿八日今
日も高野氏贈太皇太后内國忌あせとゆ十陵内を除
きふ人う故了國忌をゆ止めらむた也

十文年正月丁卯朔雅樂察内音樂告誓内國極内風俗歌
茅もか停らむタモ太政大臣贈正一位藤原朝臣内薨給
へから故と持セ日左大臣融右大臣基矩共ふ従二位小
進ミ參儀菅原朝臣是善正に位下ヌ陞ふ

従二位乃食封百七十戸 稲六千九百束 万准位四十戸 稲二千束 稲三万三千八百束 来今量千六百三十八石九斗
一升余四斗八升余五斗當分是 万職田井町稻一万束 職田井町稻一千束 来今量四千六百六
不斗余八合セ米今量六千二百四十六石三斗余
斗入一万八升六百十二俵余

同

二月廿二日今年癸巳太歲己方小次星太陰害氣也
同 一ノ己方小合星を二合乃歲と云黃帝九宮經云毒
氣流行水旱接至へく苗稼傷殘るへと云又云畿
七道境內乃ゑ詔より幣を贈く至誠より請をへき由乃

水ノノセ十六

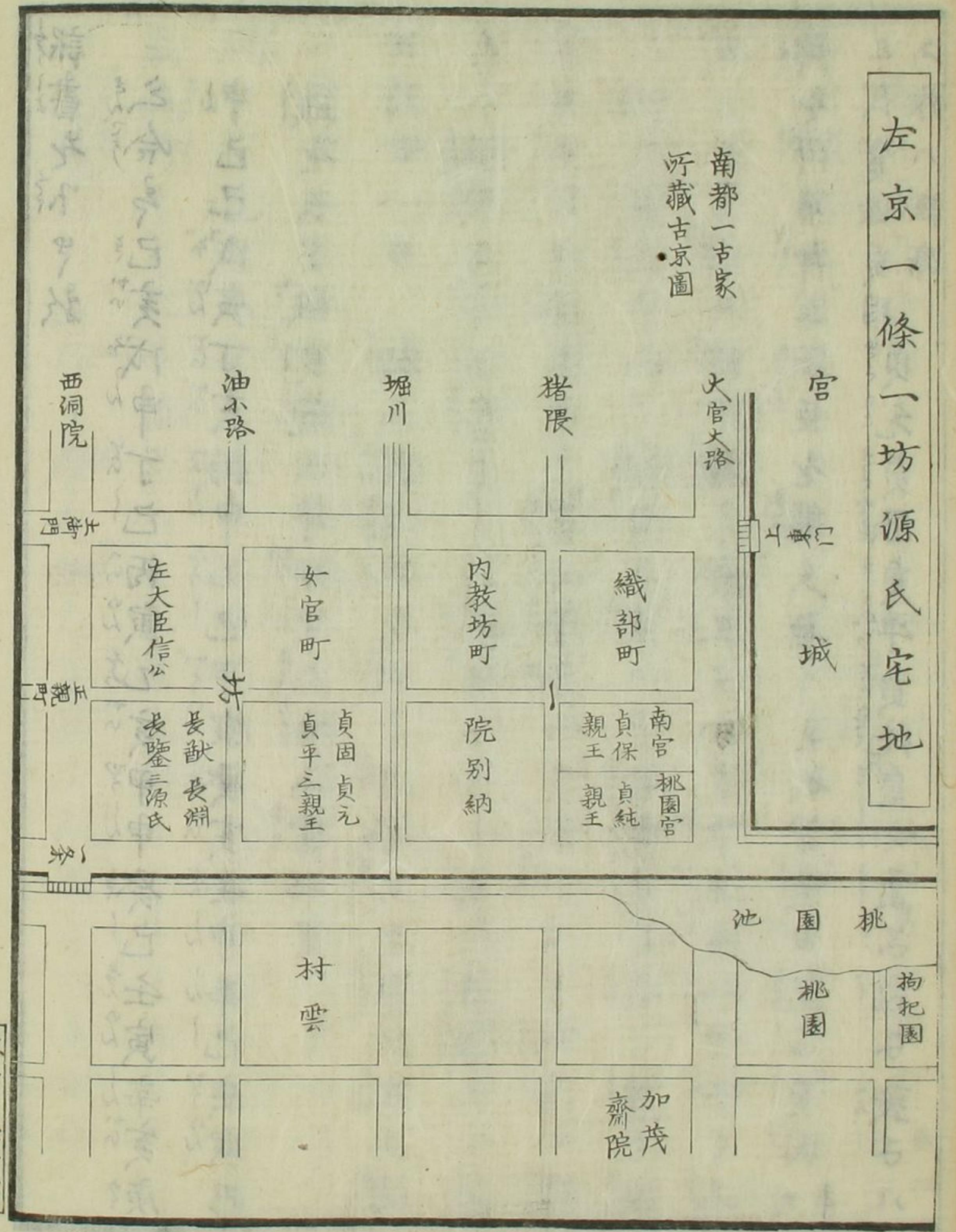
詔書を下せ致

三合より己亥戊申丁巳丙寅乙亥甲申癸巳壬寅辛亥庚
申己巳戊寅丁亥丙申乙巳甲寅癸亥壬申辛巳庚寅乃
歲を云皇祖貞觀六年甲申ニ始ふ當れ里

十四日廿一日 勅小朕涼德を以て比宇文を厚以犯ふ待
あく豚魚あくふ家あく从養生をふと爲内德豫大らひ
螽斯則而内福あく男女繁昌せ弘仁より以降の諸
ふ依へ親王とあく朝臣と爲へし今舊章を變へ德源
氏とあく中ふ就く擇く親王とあく唯其後一世早く王
號を停り即身朝臣を賜人趣へと於卫星日皇子貞固
之代實錄貞因貞元貞保貞平貞純皇女孟子包子襄子八
作ハ誤寫

左京一條一坊源氏宅地

南都一古家



今京繪圖桃園宮占地圖

別々尊崇を	考亦々々尋ふ	桃園宮の日跡	「圖か夜べ	一 氏 の 宅 跡 を	吉猪	今 古 大 官
松下子タケ	東ホリ川マニタシ	今 古 堀川	リトヌ	おがす	ハナ	ハナ
貞平貞元	サイモク丁	サイリ丁	ハム田	アツカニタシ	アツカニタシ	ヒタチ丁
ね下丁	ホリ川下丁	別 然	北古丁	アツカニタシ	アツカニタシ	新庄家丁
貞平貞元	サイモク丁	ホリ川下丁	古ハ院	アツカニタシ	アツカニタシ	織木丁
と 木 大 丁	アツカニタシ	アツカニタシ	神	アツカニタシ	アツカニタシ	下石シテ
と 木 大 丁	アツカニタシ	アツカニタシ	神	アツカニタシ	アツカニタシ	櫻井
と 木 大 丁	アツカニタシ	アツカニタシ	明	アツカニタシ	アツカニタシ	アツカニタシ
と 木 大 丁	アツカニタシ	アツカニタシ	大	アツカニタシ	アツカニタシ	アツカニタシ
と 木 大 丁	アツカニタシ	アツカニタシ	久	アツカニタシ	アツカニタシ	アツカニタシ
と 木 大 丁	アツカニタシ	アツカニタシ	久	アツカニタシ	アツカニタシ	アツカニタシ

信光圖

人を親王とあ

親王乃縁令條不見え以但に品親王食封三百戸位因三十町と云親王子後回位下と選叙令不見え色ハニセ王乃季縁絶十に足綿七屯糸七約布三十六端鐵二十ト鐵十二廷食封絶八足綿八屯布に十三端庸布三百席ふ田廿町を給をあからん是ふ依考入也は無品親王乃縁二百戸稻八千東田廿五町稻一万一千百束無品親王乃縁二百戸稻八千束田廿五町稻二萬又百束米今量九百九十分餘四斗入二斗に小當百八十立依余百八十立當是其大畧也

皇子長猷長淵長隆皇女載子に人を源氏ふか一共ふ大京一象一坊乃戸藉ヲ貫隸也

光仁天皇乃皇子に人皇女二人皆親王大足桓武天皇乃皇子十に人皇女十九人皇子三人皆親王大足平城天皇の皇子二人皇女に人皆親王大足淳朴天皇乃皇子又人皇女七人皆親王大足嵯峨天皇乃皇子廿二人一人ハ皇太子に人ハ親王十八人ハ源氏大足蓋五人も其母皇后女御た邊はあく十八人ハ其母更衣大足も故な皇相壺更衣乃所生を源皇女廿七人十二人を内親王に其母皇后女御大足十人ハ源氏と云其母更衣大足仁明天皇乃皇子十に人一人ハ皇太子セ人ハ親王其母皇后女御た邊は般足六人ハ源氏其母更衣大足故云皇女九人皆内親王と云皇后女御乃

所生者一は於是文德天皇乃皇子十三人一人ハ即
天皇臣人ニ親王大足其母富貴一八人ハ源氏夫足其
母卑叶也ハ於是皇后女十七人十人ハ内親王即親王と
同母夫足七人ハ源氏又源氏と同母夫足但源氏の所
生ハ源氏夫一故了安後氏と云ハ直人からい聞也る
於是文皇子乃源氏を一世乃源氏と云蓋嗟噦天皇上
是始れ是故子弘仁以降乃繼と云也

十一月十二日今茲収藏寒衣以民庶精休是皇太后宮
明子二代實錄云上了太皇太后あ足祖氏春官坊内封及
之服用又位以上内封祿諸王乃季祿貞觀十一年より以
降減省内物自今以後舊ふ依く減き數を無也唯服御常

膳左右馬寮内秣穀等を減せし儘ふく更ふ加進そ也と
於是然ふ了十六日公卿服御常膳左右馬寮の秣穀舊ふ
依く奉らんとを懇請せしやば請乃もアノ許モ也タク
廿六日藤原佳姫を女御とし

後宮職員令小妃二負に承ひ上支人と負嬪に負立位
以上と見也然ふ此時女御正ニ位藤原多美子位ニ
位藤原高子位ニ位上源濟子嘉子女王位下志子
等十二人あ足今佳姫を加え十ニ人紹足既に職員
令乃負ふ選夫足蓋布府基經乃意ふく天皇乃政
務ム急晴かせらんとを廢絶を教了仰

十六年二月六日 皇太子内裏ふ參らせ給ふ東宮乃東門よと出く内裏乃朔平門よと入せひ 皇太子内御所子侍もせ玉人親王公卿も仗下ふ飲宴を給ひ自餘乃群官も玄輝門乃外留候を日暮く 皇太子還宮あ

是 皇太子此
年七歳

醍醐天皇御記ふ延喜九年二月廿一日 皇太子始く朝覲あは輿乃乘く玄輝門よと入清涼殿乃北檐ふ至輦車を下り息所直曹乃候せら數と見えくるも文彦皇太子保明親王乃七歳乃時スノモ即出乃例と聞セ御記乃文を熟考きふ了東宮よと朔平門よと輿ふ乘く朔平門よと清涼殿北檐まく輦ふ乘くあらん

五月廿八日 天皇羣書治要を讀せ玉人參議勘解由長官首原是善紀傳諾み乃文を授け奉る刑部大輔菅野佐世又短乃文を進獻ト山城権介善淵愛成都構とあり今京大文源覺ハ講席ふ侍一む

群書治要五十卷唐乃魏徵著述もく太宗へ獻き魏徵唐貞觀十七年日本皇極天皇ふ率シ爰歲もく二百三十二年於く其書流傳ある爰又至是文帝是乃覽ふ備もあ蓋忠誠乃致ひ所と知へく 天皇治道ふ歴思を謁生新くてを敬禮敬瞻をへく
六月十八日傳燈大法師位以般若太寔管内縉千束を賜ひ來法りためふ入唐せしめ十七日伊豫權掾大神己

井豊後介多治真人安江等を秀藥を市志らんと爲ス入
唐せしむ九月廿一日無品惟喬親王ハ封百戸を益
十七年正月廿二日 皇太子もと先づ千字文を後せみ
ム右サ辨東宮博士橘廣相侍後ちう廿又日群書治要乃
御讀終る是日後御殿ス一々竟宴を行ひ承丈臣以下詩
を賦シ參議後ニ佐大江音人都序を作る

去年八月より夏ヌ至ル十二月ニ百廿一日般足御讀

乃速あると尋常ノ書生と云共過るあくま

廿八日 天皇始く史記を讀せ玉人參議後ニ佐大江音
人侍讀たゞ内記惟良高望都講とある高望時玉人參議
義原冬緒講席玉人侍以十月十九日皇女貞辰親王とある

時ヲ年ニ歳
十八年二月十二日皇子貞數年ニ皇女識又年ニを親王
内親王とふ一皇子長頬年ニ小源朝辰を賜人十日延
暦寺寶幢院ハ八僧を置シモ爾ノ時は官人申すお世を
補せしむ

寶幢院モ西塔を云名勝志乃ハ釋迦堂乃東南より
惠亮和尚塔を云とある開基惠亮和尚ハ慈覺大师乃
弟子妙法院乃祖あり
六月十八日故延暦寺座主慈覺乃本願大名文殊五間影
樓一基高丈三尺今八間廣五丈二尺今六尺縱三丈八尺今六尺
寛文九年再興文殊樓ハ南北内供奉十禪師傳燈大法
北六間半東西四間半あり

師伝承雲師乃遺命を銘々師乃願を果て是日勅
護王乃處とおせ廿一日一萬三千佛像を廣立幅高一丈
六尺又寫して東海山陰南海三道廿九國了分置志も乞
興寺乃僧賢獲先師故律師靜安か遺願を果さんと爲ふ
申請う故ある

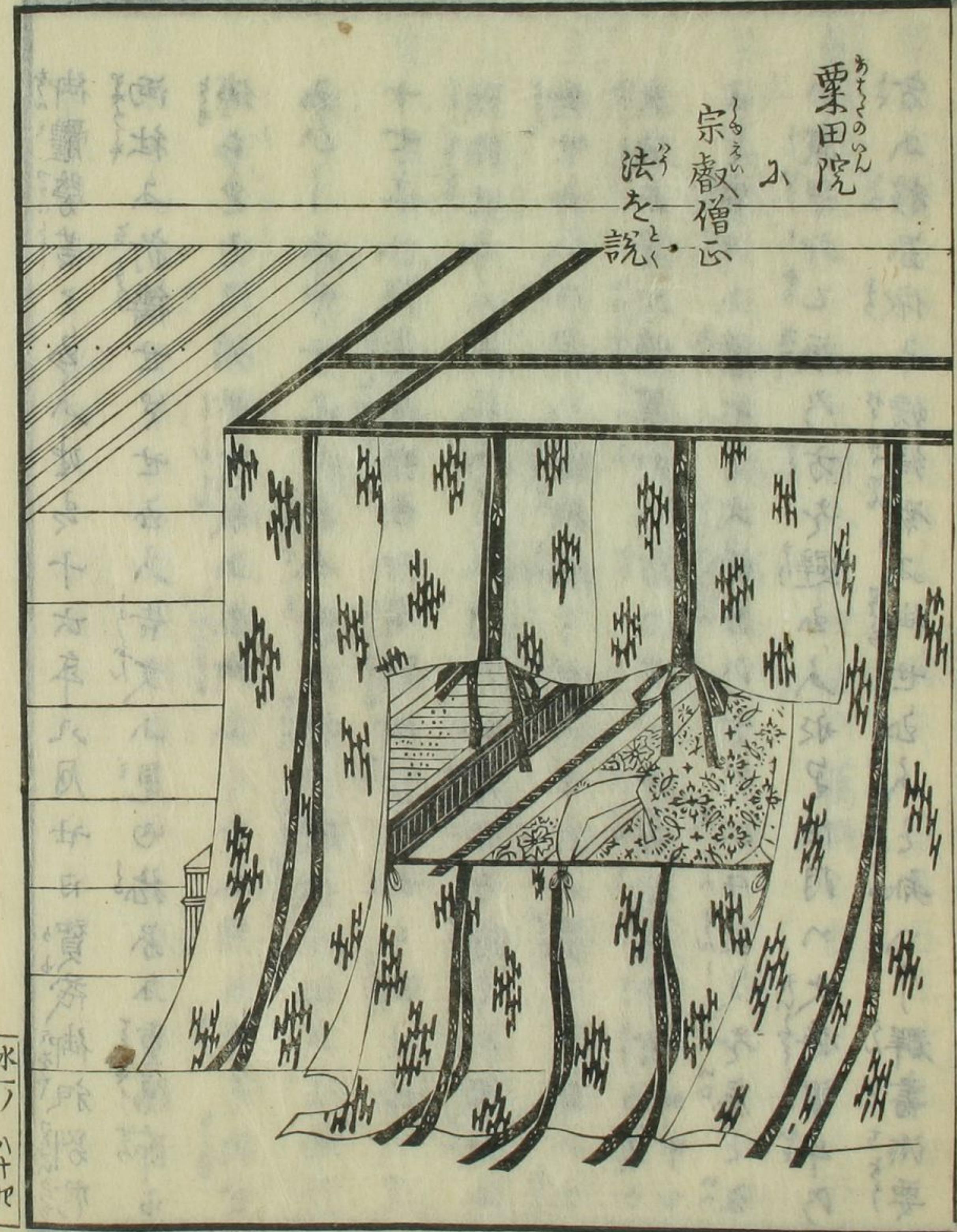
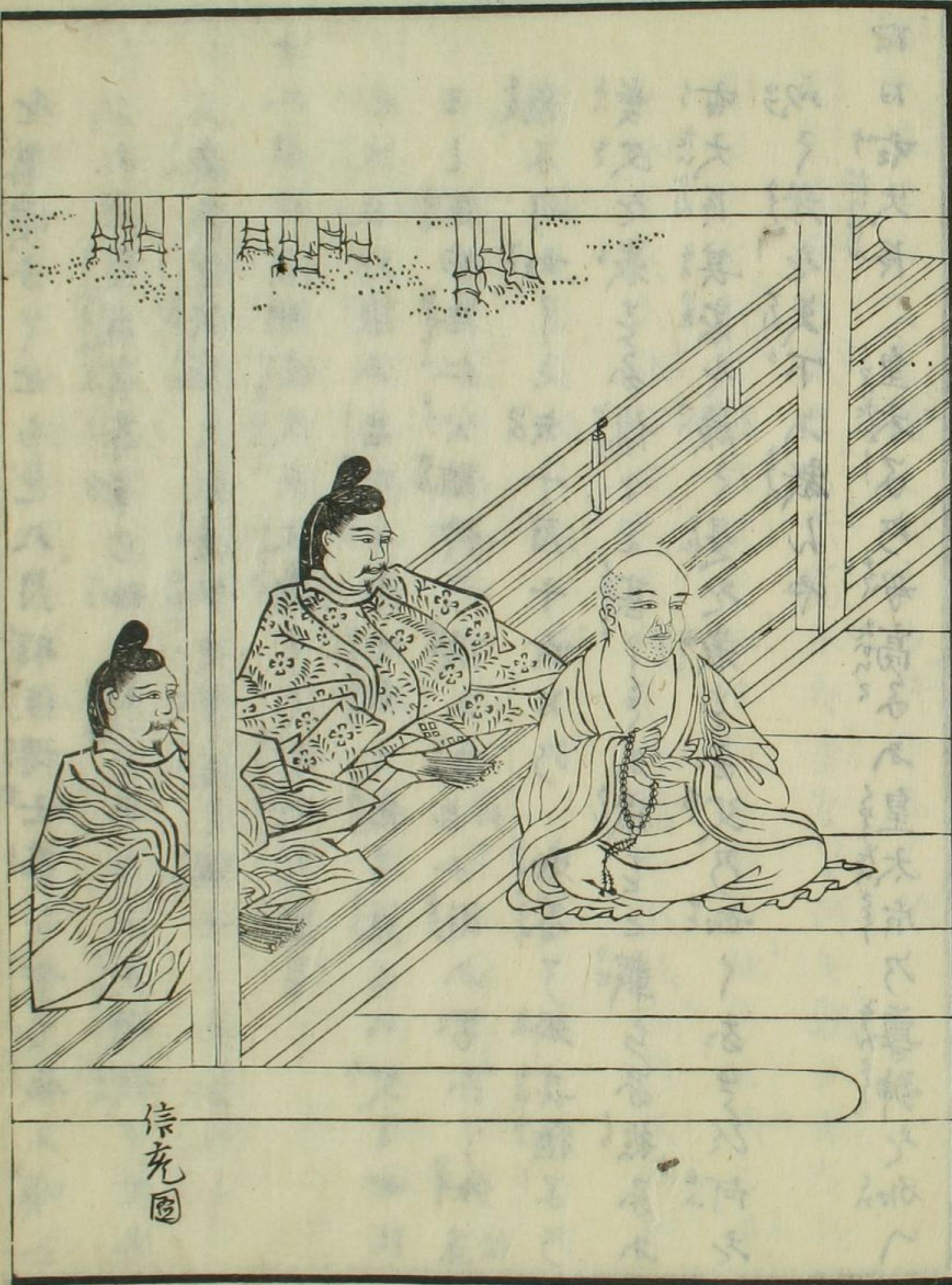
龍安承和年中禮拜佛名懺悔會を内裏ふ始行ひ漸
人間う遍く諸國う及ひうか今廿九國を盡さるふ靜
安物故せしを以て形う
七月十日に日散位大藏朝臣善行を藏人所ふ喚々御書を
授定せしより天皇左右乃年少及ひ禁中好事乃者ふ
顔氏家訓を教授せ星日講終く竟宴を行ひ數大學文章

紫萼を喚々詩を賦せしむ十一月廿八日皇子貞真
貞頼年一並子親王と以廿七日天皇深殿院ふ幸あり
廿八日使を遣て内外要處乃處を守志もく不虞を戒
あむ天皇外宮ふ出居すより故あ是日深報太
皇太后よ御使ありて懇う起居を問せ玉入廿九日
皇太子東宮よ御牛車ふ駕々深殿院う詣せ玉入今日
詣あく曰く朕薄德を以て天川口嗣を忝ふく志もへ
あいは日夜間あく慎畏々御座を宋臨て漸久く年月内
改隨ふ弊病あきらめう發是御體疲弱々朝政を聽めもふ
堪え玉入が以比年灾異繁く見ゆ天下興寧あき
を憂傷思ひとふ依々比往を脱屣ふ御病を治賜ひ園

家内灾害を以鎮め息めんと念く 皇太子と宮大夫
貞明親王上御位を授ふ人少主内萬機を親かく承を有
ふ間も右大臣政を擔へ事を行ふと忠仁公乃古事乃如く
くせよ又譲ふよ良々也は下苦むと云是景を以く
太上天皇と云號も停り諸内服御の物も停り承人と宣
入 皇太子天子乃神皇寶劍を受鳳輦御せらるゝ東
宮へ還御ある

謹く 証書を熟讀し 敬思を敬禮せ承す十月五日
五畿七道乃諸神八班大色一告文了惡人の國家を亡
かさんと謀ふ事あらば皇神走ち急く顯迹歩給へと
あふり如く深秘乃 帽顙を起させら新くあがへ

御體勞苦三多く承す十六年八月廿日賀茂御祖別當
兩社又祈禱せさせ玉人告文承見也殊承不重陽節少
停らき十月朔紫宸殿へ出御承十二月十五日詔せ
承ひ承玉や十三日神今食乃祭ハ親供し給ふと承
十七年正月青馬踏次に府賜射常乃如く御せ給へば
詔治せ承人承承へニ刀ハ仁壽殿を避く弘徽殿へ
御せ承へに及ハ綾綺殿ア遷らせ承蓋十七年ハ乞
末歲承大將軍郊乃方承少主仁壽殿中宮内裏の
ヨリ寅甲戌當れ承大將軍乃方ハ二千三百支を忌と云
ハ寅甲戌乙辰乃方を避承人承是日正月ハ大將軍午乃
方承承依ク綾綺殿へ御せ承人と承へ群書治要



を講讀おきせらむ 八月明經博士等を紫宸殿しにんでん 陞の 嘆なげ
ひ九月重陽宴等常の如く行おこなはせぬ御體疲ごたいつか させぬ
人處あり共廻とよきまわ えひ是必史筆忌かみへい 疏からせりあふへ

十二月甲辰朔右大臣上表うだいじんじょう て改かを辭さ

右大臣乃表うだいじんじょう 忠仁公ちゆうじんこう を亡叔おとね と称めい せ然らへ父ちち とせぬ
ると聞き も忠仁公臨終りんしゆう 乃誠まことに 誓ちかう 乎吾われ 忠仁ちゆうじん 既ま 男お あし海經かいき
猶うやう 子こ 乃如おほ と云い 十月十六日じつがつ 乃勅答ちくとう 了りよう 娶めい 其猶うやう 子こ
愛父めいち を表めいひ せんか傷いた よ々甚まことに ふ感かん とと載の らる然まこと ふ
古いわき 大臣だいじん 其家きけい を嚴ひざむ き是これ を表めいひ せんか父ちち 乃如おほ と
以も 參さん を天下あま ふ教き んや

12月右大臣 皇太子こうたいし 乃母高子おとねたかこ ふ皇太后こうとうご 乃尊號そんごう を加くわ へ

朝のぞむ ふ臨のぞむ せんとを請うそ と云い とゆ許ゆき ふもん
天あめ 皇みやこ 脱履ぬきゆ 内うち 後ご と云い 共とも 高子たかこ ふ妻め なま何なに 朝のぞむ ふ臨のぞむ とを
渾まろ んや右う 大だい 臣じん 経き 理り を知し き教き ふ非まへ せ他ほか の公卿こうけい ふ是これ
を知し き教き ふ非まへ せと右う 大だい 臣じん 伴とも 此この 請うそ をあひ他ほか の公卿こうけい 黙だま
あく議ぎ をあひ般はん 一いつ 疎さ か

八日 清和天せいけい 皇みやこ 乃尊號そんごう を 太上天たいじょう 皇みやこ ふ東とう は日ひ 白しら 緞と
二百足緞と 三百足白緞と 百足絹と 二足帛と 五足帛と 白緞と
百緞と 七百緞と 細長綿と 千屯と 不見綿と 四百屯と 調綿と 一萬屯と 庸と
綿と 五千屯と 細布と 千端調布と 二千端新錢と 二百貫文と 御封と
千戸と 太上天たいじょう 皇みやこ 乃宮のみや ふ奉まつ らま

御封と 二千戸と 稲と 万束と 为准と 一布と 三千端と 稲と 七萬五

千東かみとう小兎こと川がわへく綿まき一萬六千いっせん匁こし百屯ひゃくとんハ三万二千八百
斤きん小兎こと今いま乃の千九百六十八貫かん月つき入いり當あ家いえ稻いね十六万匁こし
千東かみとう小准こじゅんを綠りょく千絹せんじやくハ千斤せんこしふく今いま乃の六十貫かん月つき入いり
足あ稻いね又また千東かみとう小准こじゅんを納な千足せんしゆハ稻いね卅さん三萬東とう小准こじゅん一綴いつつ
ハ綻ひびき内うち二倍半ふたばいはん匁こし價ひあれハ五百足ごひゃくしゆハ稻いね十二万七千じっせん又また
百東かみとう小當ことう小准こじゅんををハ比ひ准じゅん稻いね七十九万千しちじゅうくわん五百東とう小汲くわく入いり
と知しヘへ一米一まい小折こせつ今いま乃の三万八千さんまん二百七十八石せき六
斗よ餘よ小准こじゅん斗入とうに九万又よ九百こひゃく比ひ外ほか小錢せん二百貫文かんぶん
を奉ささら新星しんせい太上天皇宮たいじょうてんのうぐう内うち資用しゆようと例たと也や

元慶げんけい元年正月三日正月三日天皇てんのう清和天皇せいけいてんのう第一皇子だいいちむすこ豐樂殿ぶらくでん小
於お即位そくひ乃の禮れい遂と乃の九日くわんじつ古う大だい臣おとこ基き上じょう表ひょう一い大だい將じょう

を辭さ去く天皇大納言たいりょうだいのうげん年名とねりを御使ごしふく上じょう表ひょうを清和院せいけいいん小
奉ささ去く太上天皇たいじょうてんのう勅てつ一い請うけ乃の許ゆき一い許ゆき特とく小金銀裝こひんぎんざう
寶劍ほうけん一い尺しゃくを賜たまふく儀形ぎぎょうを嚴ひざむせし一い月廿じゅうに一日參さん儀ぎ
大江音人おほえいんじん小こ太上天皇たいじょうてんのう天皇てんのう送おもてら新しん勅書てつしょ一い御諱ごいみ
を往むかせ素すへへとと奏さう一いけふふ依よ太上天皇たいじょうてんのう惟ただ上のう從つそれ
往むかせらら新しんへへとと奏さう一いけふふ依よ太上天皇たいじょうてんのう惟ただ上のう從つそれ
天皇てんのう乃の太上天皇たいじょうてんのう小こ准じゅん明子めいこ滿まつ五十いそ言こと謹こと奉表ひょう以よ臣おとこ諱誠めいじやく競誠きやくじやく暢頓首頓首死罪死
罪謹言ことととあやまあやま。

世是十一月十一日 太皇太后宮へ 太上天皇より物を
獻らるゝ 太上天皇の皇子の童親王を舞を奏
せしめふ右大臣基の男児一人 八歳後ふ同く序子
み立是慶賀解齋の宴と接聞る

元慶三年五月四日 太上天皇清和院より故右大臣良
乃鴨水の東粟田の山莊御せも入八日權少僧都宗獻
を戒師ともく 太上天皇落饗入道あしも入法諱の素
寶(宝筭)大日如來金剛手菩薩達摩手捺多阿闍梨義無畏ニ
翁玄慈阿闍梨惠果義操法潤法全宗獻延十代相承の密
教と釋迦如來廿ニ傳最澄義真圓珍宗獻と師資面授の
顯教を合せしも稟承あしも入九日 天皇粟田へ幸す

まさんと寶輿を奉受けふ處へ 太上天皇の御使右大臣
辨義原山蔭馳參るゝ御駕を停めら新廬をばた奏ひ候
く駐蹕せふ廿日大和國の米百斛を清和院ふ進く
太上天皇頭陀み中内費ふ充奉る廿二日綿二千屯穀一
百貫文を栗田院ふ奉り路中施行内新ふ充奉る廿八日
太上天皇内御為ふ僧三十人を度たら新是日後に位下
行阿波權守藤原安方 太上天皇ふ隨く沙門とあらん
とを請ゆけふを請ひまく了聴さきたり
折津守高階茂範一男正六位上格云 太上天皇の御
弟子とく同日ふ出家を法名え玄鑒のち法橋位ふ
叙一遍照僧正及ハ良勇和尚去照律師ふ浮舟天台座

主第十二代み補を後ふ花山^{アマニ}ヲ住を依^ス花山座主と

云延長^{アラシヨウ}乙年二月十一日入滅

十月廿四日寅時太上天皇牛車^{ウツクシ}又駕^カ玉人^{ミタマヒト}又大和國^{ヤマトノミコト}幸^{アカリ}せ玉人參議左衛門智源能有六肩^{ミツヨウ}乃^ハ衛士^{エイジ}を率^ス御邊^{エイヘン}供奉^{フタツブツ}叶^{ハシメル}特旨^{トクシキ}あり^ム能有及^ハ諸衛^{ツエイ}を^ハ返^ス也參^ス議在原行平^{ハラヒコヘイ}在原山^{ハラヤマ}蔭^{ハシモ}の里^リを召連^{サヅル}らき山城國^{ヤマシマノシキ}紀伊郡^{紀伊ノシキ}貞觀寺^{テイケンジ}ヲ入^ハセ玉^ヒ栗田^{スグロ}より一里半許^{チリハーフ}持^{カズハ}よ里^{チリ}大新國東^{オホシキタ}大寺^{タカヒコ}觀^{カク}寺^ジより^ハ是^シ香^カ山^{カヤマ}東大寺^{ヒガタカヒコ}より^ハ神^{カミ}野^{カミノ}香久山^{カヤハシマ}より^ハ比蘇^{ヒス}寺^{ヒスジ}神師^{カミシ}より^ハ六里半餘^{シシハーフ}龍門^{リュウモン}北蘇^{ヒス}寺^{ヒスジ}大瀧^{オオツバキ}龍門^{リュウモン}より^ハ里^リ御覽^{カクラン}あり^ム捺津國^{ナツシキタ}島下郡^{シマシタ}勝尾寺^{カツヌイ}幸^{アカリ}す^ム勝^{カツ}尾^{ヌイ}山^{カヤマ}城國^{シキタ}乙訓^{エクン}郡^{クニ}海印寺^{カイインジ}御^{カミ}ち勢^{チシテ}玉^ヒ向^{カシム}比^{ハシメル}勝尾^{カツヌイ}山^{カヤマ}寺^ジへ入^ハセ玉^ヒノ^ハ御里^{カミノシキ}

十月廿四日より明年乙月十九日まで百七十二日乃
間^{スル}あく^ミ其行程六十里餘^ス及^ス入

山寺^{サンジ}乃^ハ景勝^{ケイセイ}星好^{ハシメル}協^{ハシメル}ひ夕色^{ハシメル}は定^{ハシメル}も^{ハシメル}終焉^{ハシメル}乃^ハ地^チと思^ス
名色^{ナガタ}酒^{カク}酔^{カク}鹽^{シウ}鼓^{カク}乃^ハ類^{タガ}を御^{カミ}玉人^{ミタマヒト}と^ハ於^ク二日^ニ之^ノ日^ニ一度^ハ
齋飯^{カミツク}を進^{ハシメル}又^ハ苦修^{カツショウ}練^{ハシメル}乃^ハ常遍^{ハシメル}了^{ハシメル}越^{カツシ}大足^{カツシ}ノ^ハ和^{ハシメル}と^ハ終^{ハシメル}不^{ハシメル}變^{ハシメル}
佛殿^{ボダジ}を營^{ハシメル}造^{ハシメル}あるべ^ハと^ハ八月廿二日^ハ仙輿^{セイヨウ}を嵯峨^{カワハシ}ノ^ハ樓^{タカシマ}
霞觀^{カスガク}へ遷^{ハシメル}御^{カミ}せ玉^ヒかけ^{ハシメル}聖體^{セイボシ}不^{ハシメル}豫^{ハシメル}御^{カミ}座^ハと^ハ十
一月廿八日^ハ東山^{ヒガヤマ}乃^ハ圓覺寺^{エンゼツジ}へ入^ハ御^{カミ}おと奴^{ドウ}水尾^{ミツテ}ム月^ハ十
廿二日^ト六月百五十二日^ハ御^{カミ}座^ハ左文長^{シロモン}神公^{ミツコ}乃^ハ山莊^{サンヂヤウ}
霞觀^{カスガク}八月廿二日^ハ十一月廿四日^ト乙月九日^ト乙月九十一日^ハ御^{カミ}座^ハ廿九日^スハ東大興福^{ヒガタカヒコ}光興^{カクキ}西大藥師^{カシタ}大安^{カツアン}法隆^{カツラウ}招提^{カウテイ}
延壽^{カツシ}九寺^{クシ}及^ハ新藥師^{カシタ}に至^ス香^カ山^{カヤマ}長谷^{ヒロハ}壺坂^{カク}崇福^{カツル}梵^{ボン}教^{キョウ}觀^{カク}

光神野之松子島龍門十二寺へ使者を遣て燈油
名香細綿新絹を贏う大般若經を轉讀せし功德を
修く太上天皇御豫年復を祈禱かく凡人十二月二
日僧百人を度く太上天皇乃御為ふに日御疾既
ふ大漸ふ人と云共近侍の僧等ふ金剛輪陀羅尼を誦せ
おめ正しく西方に向ち勢ら色年ふ宣印を結らせふ入
儘ふく申ニ刻許年終了崩ゆ一法を寶篋ニ十一宸儀動
せし儀祓とく生歎う如く念珠猶御手ふ懸モ結跏趺
座顛卧と般くまゝは一夕是星夜大地震動立六過ふ及
へ里五日遺詔ふよ里百官役ひ諸國哀を舉ひ素服を停
め縁葬の諸司を任せら世人と云共何乞心表うれ無ら

むや宴飲作樂美服を著てを禁らるる而一と剝ら也文諸
衛嚴警伊勢近江美濃の間を固めらるゝて例の如く文
大藏省乃商布二千段貞觀錢百貫文を圓覺寺ふ進り
る七日獄乃繫囚二百人ふ錢二十文と賜ふく放却大承
是夜酉に刻太上天皇を愛宕郡上栗田ふ茶毗ノ寺
御懃を水尾山乃上す置奉る天皇素服をうふへは
太政大臣基及び敷上乃近吉清和院乃上下諸人にか徧
素ひ崩御より十日初七ふ當らせふ人ふ依栗田寺へ
左中辨藤原春景一人内務令圓覺寺へ勘解由長官橋廣桐
内務助常寂寺へは右近衛少將平正範内務令禅林寺へ
一人内務属貞觀寺へも内藏頭和氣尋範
は右近衛中將源直内務属貞觀寺へも内藏頭和氣尋範

内藏寮史觀空寺へは右兵衛權佐又京姫行内眷屬水尾
生一人山寺へは左兵衛佐源湛内眷屬を御使ふ佛布施水齋
一斤細屯綿一連僧布施調綿二百屯を齋らして轉念功
徳を修せしむ十一日僧五十人を圓覺寺へ延々今日よ
りに十九日又至まく晝ハ法華經夜ハ光明真言を誦せ
先む十七日ニ七乃御佛事歟廿四日ニ七乃御佛事歟
五年正月庚辰朔に七乃御佛事歟七日東大寺へ左兵衛
權佐益原高藤尉一人府興福寺へ左馬助安信二寅元一
人生一を遣ちモ各綱舟百五十端を贏うゝ轉念功德
を修せしむ又額陀歷覽乃十三箇寺へも使者を遣ち
功德を修せらる但明日正當五七あると云共重日ある

故了避々今日ふかや家とかや十又日六七乃御佛事
闕廿二日七七乃御齋ハ圓覺寺ふく修せらるゝ了より
親王公卿寄彼處了集會せニ月十一日近江國儀井郡
大浦莊乃聖田廿八町又段百八十九歩ハ清林院乃領
ヨリ延暦寺ふ施捨もく文殊樓七軀乃大聖文殊并
五佛燃燈修裡乃新み充らる十ニ日圓覺寺を以て官寺
とあやれ

又年十二月十四日周忌齋會を圓覺寺ふ設く一切經を供
養し太上天皇乃轉念功德を修し人
六年十二月十四日御忌を圓覺貞觀水尾寺乃三寺ふ設て
功德を修せしむ達親乃綿二百十一屯を各寺ふ施せし

信充謹々貞觀の政績を考へ奉る。お初ハ攝政の守成
お拘束一事を、姑息をふれ、別ふ議をへき般く觀へ
そ般一中ハ親政乃、叡思弘仁の聖蹟を研究。近時
乃凌夷を改革せキ。世兵士劣更後、倭媚便嬖乃為。
聖體を勞。聖懷達せし且唐乃太宗二兄を指。貞
觀乃義政を興させと云。共常様の詩を嘲。ふを得し今
三兄を諭。貞觀の例を追ふ。聖旨安やかに。又小野
乃幽邃。北。北水雄ふ臨。幸ゆ。まへ友愛乃
宸襟を追思奉。是。追源連々。大足綴ふ薰陋を恥。此
篇を作焉。蓋。聖德乃遠く播及せんことを庶幾と恐
惶恐怖。謹言甲斐國源氏栗原孫之丞信充

